

## 小規模多機能型居宅介護 和が家「サービス評価」 総括表

法人名	有限会社 パートナーステーション	代表者	小原 陽一	法人・ 事業所 の特徴	高齢者が慣れ親しんだ地域での生活が継続できるよう、人と人が助け合い、1日1日が高齢者の生活にとって質・量ともに適切な支援が受けられ、また個人の尊厳ある生活が確保されていくことを目指します。 自然豊かな春光台に位置する地域性を活かし、毎日の生活の中で自然を感じながら、優しく穏やかな時間が共有できるよう共に過ごして行きたいと考えます。
事業所名	小規模多機能型居宅介護 和が家	管理者	伊藤慎悟		

出席者	市町村職員	知見を有するもの	地域住民・地域団体	利用者	利用者家族	地域包括支援センター	近隣事業所	事業所職員	その他	合計
	人	1人	2人	4人		1人	人	3人	人	11人

項目	前回の改善計画	前回の改善計画に対する取組み・結果	意見	今回の改善計画
A. 事業所自己評価の確認	職員が働きやすい環境作りを取り組み利用者へのニーズに少しでも実現できるように取り組みます	職員の働きやすい環境作りと利用者ニーズの実現に向け、情報共有の仕組み化や職場内研修を推進している。地域資源の協力を得て、ご要望を聞き取り可能な範囲で柔軟に対応する体制が整いつつある。	入居者ファーストで施設運営がなされており、個々のスクリーニングに応じた対応ができています。資格取得やスキルアップ研修への参加について、一部消極的な職員も見受けられるため、さらなる参加促進を期待する。	AIによる議事録作成やタブレット記録を積極的に活用し、事務作業時間を削減する。それにより生まれた時間を、利用者との直接的なケアやコミュニケーションに充てる。
B. 事業所のしつらえ・環境	利用者様やご家族様からの意見を収集し、居心地の良い空間を提供していく	運営推進会議を通じて地域やご家族の意見を運営に反映させ、居心地の良い環境づくりに努めている。また、身体拘束や虐待をなくし、プライバシーに配慮した安心できる空間の提供できるように心がけている。	本人はもとより家族とのコミュニケーションも良好で、生活環境・居心地の良さが確保されている。プライバシーへの配慮や気遣いがなされている。	日々の会話から利用者・家族の意見を収集し、プライバシーに配慮した安心・安全な居心地の良い空間を提供し続ける。
C. 事業所と地域のかかわり	利用者様が地域の一員をして関わりのある場を増やし、地域社会に貢献できる事業所を目指していく	町内のお祭りや敬老会に参加できた。また、地域の子供たちも各イベントで訪れてきている。輪が家カフェを2ヶ月に1回開催され地域の方と交流をしている	地域へ出向くこと、地域の方が来ることの双方向で交流ができており、生活の潤いになっている。地域の困りごとに対し、アウトリーチの手法を用いて把握・改善しようとする姿勢が見られる。	和が家カフェの定期開催や、ボランティアを招いたイベントを通じて、地域住民や関係者が気軽に立ち寄れる関係性を維持する。
D. 地域に出向いて本人の暮らしを支える取組み	利用者様と地域住民がともに楽しめるイベントに計画的に参加、開催し地域社会にとって身近で頼れる事業所を目指していく	本人の趣味活動や床屋など馴染みの場所に通ったりイベントなどにも行く機会がある	本人の「したいこと・必要なこと」を考慮し、職員が工夫している様子が写真や報告から伝わる。個人の趣味（絵画など）に応じた取り組みが行われている。	「季節の見頃・食べ頃」や「地域のイベント情報」を迅速にレクリエーション計画に反映させ、利用者が季節感や地域とのつながりを感じられる外出を支援する。
E. 運営推進会議を活かした取組み	利用者様やそのご家族、地域住民の意見や提案を聞き取り、その内容を迅速に実行に移せるように取り組んでいく	運営推進会議の参加として幅広く参加して意見を頂けている。情報共有や介護の啓発活動もでき地域に知って頂けるよう取り組めた。	行事の写真を見て理解できるように、利用者さん一人一人の趣味に応じて取り組みを行っていることがわかる。本人が何をしたいのか、何が必要なのかを考慮し、職員で工夫している	活動報告や写真を通じて、事業所での生活の様子を地域に分かりやすく伝え、信頼関係を深める。
F. 事業所の防災・災害対策	災害発生時の安全を確保するために、定期的に避難訓練を実施し利用者様や職員が適切に対応できる能力を身につけていく。	地震時の対応や避難訓練を2回実施してきた。運営推進委員の方や消防団の方にも見学して頂き意見を頂くことができた。	避難訓練において、スタッフが連携して利用者を適切に誘導できており、消防団や関係者からも高く評価されている。個々の身体状況（車椅子や独歩など）に合わせた避難方法や、災害時の具体的な逃げ方について、繰り返し訓練し周知することが重要である。	災害時に備え、食料や水などの備蓄量を再計算し、使用期限管理を含めて十分な量を確保する。利用者の身体状況（独歩、杖、車椅子など）に応じた具体的な避難方法やルートを検討し、反復訓練を行うことで、利用者自身も安心して行動できるよう支援する。